

平成23年度 工芸科学部 学位記授与式
学長告辞

本日、ここに学士の称号を得て卒業を迎えられた700名の皆さんに対し、京都工芸繊維大学を代表して心からのお祝いを申し上げます。また、この日に至るまで長い間にわたって皆さんの勉学を支えてこられたご家族および関係者の方々のご労苦に対して深い敬意を表します。

皆さんは、本学の教育課程で研鑽を積まれ、輝かしい成果を挙げ、本日目出度く卒業式を迎えられました。本日は、皆さんが過ごしてきた大学生活を振り返る日であります。専門について深く学び、友人、先輩、後輩との思い出深い時を過ごし、そして、多くの先生方から指導を受けたことなど、本学での学生生活をじっくり振り返り、吟味するのは、今日において他にはありません。

また、皆さんは、ご家族をはじめ多くの人々のご支援によって今日を迎えることが出来たことと思います。今日は、そのご恩を振り返り、感謝する日でもあります。

皆さんは、明日から、本学で学んだ知識と経験を糧に新しい世界へ船出されることとなります。そして、企業での仕事、あるいはもの作り、また大学院での研究等、様々な仕事に従事され、社会的自己実現を果たされることとなります。小学校から大学までの教育は、実は、この社会的自己実現に向けての準備であったのです。この意味で、大学の卒業は、皆さんの人生の中でも大きな節目となる出来事であります。

昨年3月11日に起こった東日本大震災・福島第一原子力発電所事故は、多くの人々の生命・財産を奪い、社会基盤となるシステムが壊滅的に破壊しました。

あれから1年たった今、被災地の人々は、大きな苦しみや悲しみを乗り越えて復興にあたらうとされておりますが、復興は、人々が期待するようには進まず、解決の道筋が見いだせない問題が山積しています。

この様な中で新たな人生に船出される皆さんには、本学で研鑽された成果を十分に生かし、それぞれの人生の新たな段階を切り開くとともに、東日本における社会基盤の復興・再生のためにも貢献して頂くことを希望します。

今日は、新しい旅立ちをされる皆さんに、本学の卒業生として心に留めておいてほしいことについて話をさせていただきます。

それは、ものづくりにおいては、「感性」が極めて重要であるということです。

昨年2011年 10月 5日に56歳で死去した、アメリカ・アップル社の創業者であるスティーブ・ジョブスは、世界中の人々にその死を惜しまれました。彼は、ご存知のように、IT産業分野に大きな革命を起こしました。その結果は、我々の生活にも大きな影響を与えました。

そこで、今日は、このジョブスの革命的成功の鍵が、彼が感性を重要視したことにあったということについてお話をしたいと思います。

2005年に、ジョブスが米国スタンフォード大学で行った卒業祝賀スピーチは、イノベーションとは何かを伝え、アメリカのみならず世界中の若い人々に広く感動を与えたと言われております。スピーチの内容は公開されていますので、皆さんの中にもご存知の方が多数おられると思います。

彼は3つのことを述べております。1つは、connecting dotsというキーワードで、自分が生まれてから現在に至るまで経験してきたさまざまな事が、ばらばらの事象ではなく、意味深いつながりになっていた、そしてこのことが成功につながったといっています。

2つめは、love and lossというキーワードで、大切なものを見つけることができ、そしてそれを失ったという2つの経験が今日の成功につながったとし、再起と躍進の理由について、次のような内容のスピーチをしています。

「私が挫けずにこれまでやってこられたのは、唯一つ、自分のやっている仕事が好きだったからです。素晴らしい仕事をしたいと気持ちがあるなら、進むべき唯一の道は、好きな仕事をするることである」と述べています。

3つめは、deathというキーワードで、人生にどのように向かうべきかについて、次のような内容のスピーチをしています。

「あなたたちの時間には、限りがあります。自分以外の他の誰かの人生を生きて無駄にする暇なんかはありません。ドグマという罫に、絡め取られてはいけません。自らの内なる声、心、直感というのが、自分が何になりたいと思っているかを教えてくれます。したがって、耳を澄まして内なる声を聞き、それを大切に生きていかなければならない」と述べています。

そして、最後に、stay hungry, stay foolish （ハングリーであれ、愚直であれ）と述べて、スピーチを終えています。

stay hungry, stay foolishという言葉は、1960年代後半、ジョブスが若い頃、同世代の間でバイブルになっていた、The Whole Earth Catalogという雑誌の製作者であったスチュアート・ブランドが、雑誌の最終号で、お別れのメッセージとして背表紙に記した言葉だそうです。

ジョブスは、常に自分自身が、stay hungry, stay foolish でありたいと思っていたと述べています。

そこで、この言葉について、少し深く考えてみたいと思います。

stay hungryという言葉は明瞭ですが、stay foolishという言葉は、哲学的意味を持つすこし難解な言葉です。Stay foolishを馬鹿であれと訳す場合が多いのですが、この訳は、私には、すこし軽すぎるように思えます。

では、どのような意味なのでしょう。その答えのヒントは、同じ内容の言葉を述べた人々の思想にあると思います。

その一つは、今から800年前、仏教の一派である浄土宗を開いた法然上人の言葉です。法然上人は、建暦2年正月23日（1212年2月27日）、死の直前に遺言として残した、「一枚起請文」というお経の中で次のように述べています。

「・・・たとい一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になした、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし、・・・」。

これは、法然上人の愚に還るという意味の「還愚（げんぐ）」という教で、現代の言葉に訳せば、次のような内容の言葉です。

「たとえ仏教経典をすべて読み尽くしていても、何も知らない無知で愚かな人と同じ気持ちをもって、無知無学の人と同じように、また、才能や学問のあることをひけらかしたりしないで、ただひたすら念仏を唱えなさい」ということです。お経を唱えるときの心構えについて述べた言葉で、まさに、stay foolishと同じ意味をもつ言葉です。

他の一つは、真の幸せを得るための生き方について描かれた、ロシアの文豪のレフ・トルストイの「イワンのばか」という1886年の作品です。トルストイは、ご存知のように、「アンナ・カレーニナ」や「戦争と平和」の著者ですが、「イワンのばか」という作品では、愚直さが、人生を送るに際して、いかに重要であるかを述べています。軍人と商人として成功した2人の兄と野良仕事に励む愚直なイワンの3人兄弟が悪魔の計略のターゲットにされるという物語です。

成功していた2人の兄は、悪魔の計略にまんまとはまり没落していきませんが、イワンだけは、無私無欲な愚直さのために、常に悪魔の計略を逃れることができ、幸運に恵まれるのです。イワンは、計略にはまって困窮した兄たちの勝手な要求も常に受け入れ、生活を助け、最終的には3人の兄弟の皆が幸せになることができたのです。人生において、愚直さが如何に大切であることを述べています。

実際に、トルストイ自身も50才代後半に、野良着を身に付け農耕に励む生活をして「イワンの馬鹿」におけるイワンのように生きようとしたそうです。

なぜ、愚に還ること、愚直であることが、重要なのでしょうか。

それは、「愚」を求めることによって「智」が見えてくるからです。法然上人の生きた12世紀から13世紀の日本は、仏教は鎮護国家を機軸として官製の仏教、国体を守護するために国家宗教で、特権階級のためのものでした。そして、天災・人災が人々を襲い、末法の世、希望なき時代でした。これに対して、法然上人は、仏教の原点である「人間個人がいかにすれば救われるのか」を問い、万民に平等な仏の教えを説くことによって、人々に希望を与えようとしたのです。そして、その思想の真髄は、「一文不知の愚鈍の身になす」ことによって仏教の真髄を会得することができるという考えでした。

スティーブ・ジョブスがそうありたいと願った、stay foolishという心構えは、1960年代後半、アメリカで若者に広く支持されたカウンター・カルチャーの運動のなかで生まれた言葉でした。カウンター・カルチャーは、当時の資本主義の危機に対する運動で、支配的文化に対する批判、文化的な抵抗を通じて、新たな消費社会のイデオロギーをつくる一翼を担ったとされています。

このように、愚であろうとする、stay foolishという心構え、生き方は、既存の価値に囚われずに物事を原点に戻って見据えて、新しい価値を創造するためには、重要なことなのです。

また、「愚」を求めることに重要性を主張した3人の共通点は、共に、万民が幸せになるという目標をもっていたことです。法然上人は、万民が救済されることを願いました。トルストイは、帝国主義や植民地搾取を批判した非暴力主義者でした。そして、スティーブ・ジョブスは、「技術は社会をよくするために在るべきである」と考えていました。

このような目標を達成しようとしたとき「愚」を求めることが重要であるという考えに行き着いたのです。

ジョブス氏が、「愚」を求めて見えてきた「智」は、「人間の感性に対しての

敬意」でありました。

コンピュータなどの情報機器は、一般には、「知性の道具」として考えられており、その開発では情報処理の効率化ということが主眼になっています。

これに対して、ジョブスは、情報機器を「感性の道具」として考えたのです。したがって、開発の主眼は、如何に、人の感性を豊かにし、使う人に喜びを与えることができるかということでした。

そして、「人間の感性に対して最大の敬意を払う」ということの現われが、操作性やデザインにこだわりつくすということでした。人間のもつ鋭い感性に応えるものづくりを目指したのです。感性を敬うという「智」は、情報機器に、新たな価値を与え、それを使う人々の価値観にも大きな影響を与えたのです。彼は、人間にとって、感性が大きな意味をもつことを鋭く見抜いたのです。

「自分の内なる声、心、直感を大切にすること」、「好きな仕事をする」とことという彼の若い人たちへのメッセージは、感性を大切にこそ知性が生きるというメッセージでもあります。また、「愚」を求めることが、イノベーションを可能にすることを、彼自身が、自らの人生の中で実証したのです。

本学は、その理念で、「人間の感性と知性が響き合うことこそが、新たな活動への礎となることを深く認識し、知と美の融合を目指す」を謳って、教育・研究を行なっております。本学で学ばれた皆さんは、それぞれ、感性と知性を磨いてこられたことと思います。

明日から、新たな挑戦を始めることになる皆さんには、本学で学んだことをそれぞれの立場でさらに深め、「愚」を求めてあらたな「智」を見出して下さい。そして、世界を技術によってよりよいものとするために、そして、技術によって人々が喜びを享受できる社会の構築を目指して、前進していただきたいと思います。

皆さんの活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞と致します。

本日は、学士の学位取得、まことにおめでとうございます。

平成 24 年 3 月 26 日
京都工芸繊維大学長
江島義道